



ある小学校で、一年生から六年生まで全員が体育館に入り、人権について学習する機会がありました。内容は、「思いを伝え合おう」をテーマにした作文の発表です。友だちとけんかをしたけれど、仲直りできてうれしかったこと、ウソをついたのに正直に謝れなかったことなど、これまでの体験をもとに、今の自分の気持ちを発表したあと、他の子どもたちがその作文への感想を手を挙げて出し合っていました。

最後は、六年生のユキちゃんの発表です。内容は次のようなものでした。

「……私の顔の色はみんなより黒いです。友だちとぶつかったりしたとき、『黒ー』『顔、黒いな』と言われたりします。私はとてもつらいです。学校へ行くのが、つらいときもありました。……」

作文を読み終えると、ユキちゃんはうつむいたまま自分の場所へ戻りました。体育館は静かなままでした。しばらくすると、六年生の女の子が手を挙げました。「ユキちゃんごめん。軽い気持ちで言っていた。これからは言わない。信じてほしい。」別の子は、「わたしもそれを聞いて笑っていたことがあった。ユキちゃんがそんなにつらい気持ちでいるなんて知らなかった。」六年生だけではなく、他の学年からも次々に意見や思いが出されました。ユキちゃんはうつむいたまま、じっとそれらの話を聞いていました。

その時です。ユキちゃんといつも遊んでいる一年生が手を挙げてこう言いました。

「わたしは、今のユキちゃんが好き。ユキちゃんは、色が黒いのがよく似合う。」

ユキちゃんの顔がふっと上がりました。そして、ゆっくりとその場に立ち上り、

「ありがとう……。これからもたくさん遊ぼうね。」
涙声でしたが、顔には笑みがありました。

この一年生は、ユキちゃんと家が近く、幼い時からいつも一緒に遊んでいて、ユキちゃんを本当のお姉ちゃんのように慕っていました。この子にとっては、いつも遊んでいるそのままがユキちゃんであり、顔の色が黒いことや、その他の特性も全部ひっくりめて、自分にとってはなくてはならない大好きなユキちゃんなのです。この一年生の言葉は、うつむいているユキちゃんをなぐさめるための言葉ではなく、自分の気持ちを素直に言ったものだったでしょう。けれど、ユキちゃんにとっては、他のどんな言葉よりもこの一言がうれしかったのです。ありのままの自分を認めてもらえたことで、自分自身を受け入れ、前向きになることができただけではないでしょうか。

思いを出し合った体育館には、仲間とつながっていく温かい空気が漂っていました。